



立科町児童館の集会室壁面に、下の写真のような、ドロシー・ロー・ノルト（アメリカ・教育家・3児の母・1924～2005）の詩の扁額が掲げられてあります。

教育相談員の任を拝命した4年前の4月、この縦52・5cm横21.5cmの扁額に接し、えも言われぬ懐かしさを覚えました。中学教師としての自分が心から共感し、多くの親御さんにお伝えしてきた詩「子は親の鏡」との予期せぬ再会だったのです。

懐かしさに、しばしの間まじろぎもせず、詩の一字一句と墨痕の凛とした美しさ、丹精な木製扁額に見入りました。そして、扁額を仰ぎ見ながら、立科町における教育相談という新しい任務に対する緊張と不安がほぐれ、気持ちや和むのを感じていました。

その後も折々に鑑賞していますが、その都度、必ず清新な感銘を覚え、

この扁額には、樹齢千年に垂んとする根幹隆々とした巨木のような不可思議な力が宿っているのではないかと考えています。

そこで、立科町児童館の初代館長・加藤正弘さんに掲額の由来をお訊きました。

「立科町児童館は、平成10年に開館しました。開館当初は、もちろん建物や施設はととのっていましたが、温かさとか潤いとか、児童厚生施設としての環境面はまだ十分とは言えませんでした。遊具や蔵書なども少なく、壁いっぱいのリカちゃん人形もありませんでした。そのため、開館2年目くらいでしょうか、児童館をよく利用されていた若いお母さん・赤沢の笹井由佳利さんが、子育ての拠り所とされていたドロシー・ロー・ノルトの詩を、毛筆で浄書した短冊20葉を寄贈してくださいました。笹井さんが、書道の先生として活躍されているご実家（宮崎県串間市）のお母さん・鈴木和晃先生に書いていただいた短冊です。書の見事さと、毎日の生活における親の姿が子どもに最も大きな影響力を持つ、という詩の教えに心打たれ、すぐ建具職の方にお願ひして、立派な扁額を作ってもらいました。そして、

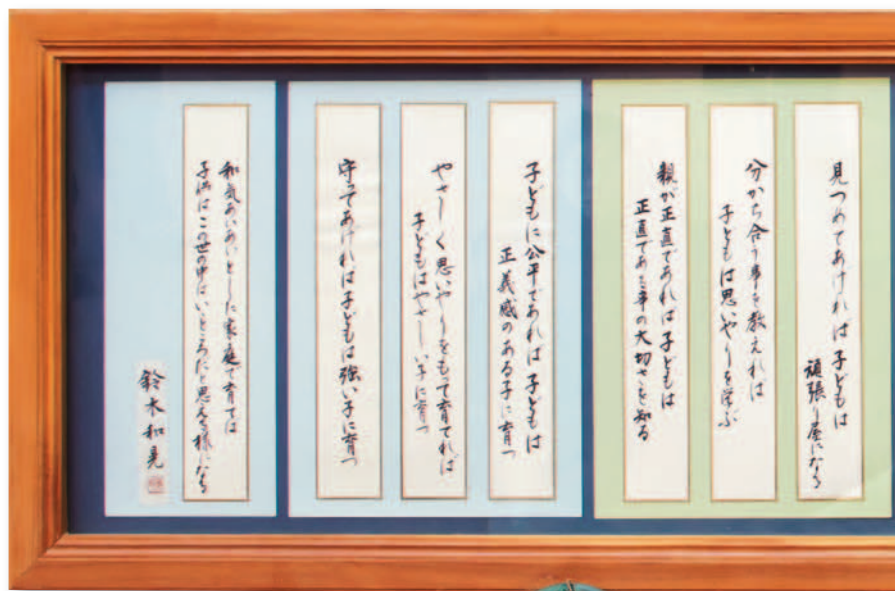
現在の位置に掲げたのです。」

書かれた方の清廉なお人となりが見られる端正な毛筆文字からも強く伝わってきますが、笹井さんのお母さんは、故郷から遠く離れた信州の地・立科町で暮らし、子育てにいそしむ我が娘への溢れる思いを胸に、母親として、書の美と伝統を伝える書家として、全身全霊を傾けて揮毫されたのでしよう。加藤さんのお話を伺って、このようなくつもの厚意と善意と熱意がひとつに結実した経緯を知り、この扁額に宿る不可思議な力の源が理解できたような気がしました。

日々の繁忙さに押し流されて、つい忘れがちな「子育ての原点」と、常に原点に戻ることの大切さを教えてくれるこの扁額は、児童館に集う若い親御さんへの「応援歌」なのでしょう。

この、立科町児童館の詩「子は親の鏡」の扁額が、これからも幾久しく立科町の「子育ての指標」であってほしいと願っています。

参考・引用図書「子どもが育つ魔法の言葉」ドロシー・ロー・ノルト著  
レイチャル・ハリス 著／石井千春 訳／PHP研究所発行



立科町児童館に掲げられてある扁額

相談時間等

月・水・金曜日

- 立科小学校／午前9時～午前11時30分  
電話 56-3131 (呼)・有線2190 (呼)
- 立科中学校／午後2時～午後5時  
電話 56-1076 (呼)・有線2251 (呼)
- 立科町児童館／  
午前 11時40分～午後1時30分  
電話 56-0303 (直通)  
有線 8889 (直通)

※予約をされる方は児童館または小・中学校の教頭先生へご連絡をお願いします。